

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 19 日現在

機関番号：27601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520068

研究課題名(和文)メキシコ低地マヤ地域におけるマヤ・カトリック的宗教文化統合の実証的研究

研究課題名(英文)A Study of Catholic Culture Integration of Lowland Maya Communities in Mexico

研究代表者

中別府 温和 (NAKABEPPU, HARUKAZU)

宮崎公立大学・人文学部・教授

研究者番号：00155805

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は宗教的文化統合という仮説的概念を使用し、メキシコ低地マヤの一カトリック村落マニの社会構造、時間・空間感覚、経済的態度、儀礼慣習を長期にわたり集約的にかつ個人・集団の両面から厳密に調査することによって、メキシコ中南米におけるカトリシズムの現実を解明することであった。その結果、マニのカトリシズムはマヤ・カトリシズム複合体であること、また、その存続変容の過程では宗教的理念にもとづく内調整(inner adjustment)が強く働き、人々の暮らしの全面において彼らの思考と行動を強く方向づけていることを解明した。この成果は後述する和文(323頁)・欧文(224頁)の報告書に総括した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this scientific research is to clarify the complicated realities of Maya-Catholicism in Mexico and Central and South America by means of long-term intensive fieldworks of the social structure, time perception, space perception, economic activities and ritual practices of a Catholic community of Mani at the individual level as well as at the collective level. The main finding is that Catholicism in Mani has long survived transformation as Maya-Catholicism and that in the course of transformation the inner adjustment mechanism has worked in conformity to religious ideas directing their thought and behavior towards the desired life in every aspect of their everyday activities. The results of research are introduced in two Grant-In-Aid Scientific Research reports. The Japanese report has 323 pp. and the English one has 224 pp.

研究分野：人文学

キーワード：マヤ・カトリシズム複合体 宗教的文化統合 内調整 時間感覚 空間感覚 儀礼慣習

1. 研究開始当初の背景

メキシコ・カトリック文化の重要な歴史的基層はアステカとマヤである。これらの基層の十分な研究なしに、メキシコの核心に位置するカトリック文化の理解は困難であろう。

従来、マヤ文化に関しては、R.Redfield、J.Eric S.Thompson をその先駆的研究者として、最近では E.Vogt を中心とするハーヴァード大学文化人類学的研究グループやフロリダ大学の生態学的プロジェクトなどの優れた業績が蓄積されてきている。

また、日本においても、石田英一郎、泉靖一、増田義郎、落合一泰、八杉佳穂を中心として文化人類学および言語学的調査研究が展開されてきている。さらに、考古学的な学術調査としては、中村誠一をリーダーとするホンジュラスやコパンでの国際的に評価の高い研究成果などを銘記する必要がある。

しかしながら、マヤ文化を宗教学的な視点と方法によって分析した研究の蓄積は非常に手薄であると言わざるを得ない。

マヤ・カトリック社会の宗教現象を理解するためには、上述の先駆的で秀逸な業績である考古学、言語学、歴史学、民族学の領域からの接近とともに、社会学および人類学的方法による宗教学的の研究も不可欠であると考えられる。特に、マヤ・カトリック社会の低地マヤ地域 (Yucatan, Quintana Roo, Campeche など) においてそうした研究に取りかかることの学術的意義はきわめて高いと考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、メキシコにおいて重要な基層をなしているマヤ文化とカトリック文化を、その時間・空間構造、社会構造、心的態度などの分析視点から厳密に調査分析し、その結果を提示することにより、将来のメキシコ中南米のカトリシズムの宗教学的調査研究の基盤となる実証的基礎資料を提示することを目的とする。

この研究目的を達成するために、次の方法をとる。

- (1) 従来研究成果をまとめた和文・欧文の報告書の作成

1983 年以来研究を継続してきているので、従来調査研究結果の中で特に重要と考えられるものを取り出し、再検討した後、今回の調査研究結果と合せて和文および欧文の報告書を作成し、将来の調査研究の一参考資料として提示する。

- (2) 個人の断面による時間・空間感覚に関する第一次資料の蒐集とその分析

今回の調査は時間・空間感覚についての第一次資料を TAT 型の有意味図版・写真を使用した心理学的な方法によって蒐集し、個人的断面における分析を行い、それらの結果を従来の調査研究成果である集団の断面の分析と合せて全体像を構成する。

- (3) 研究成果全体を開示するアーカイブの構築

さらに、この研究目的を達成する一つの補助的手段として、特に重要と考えられる研究成果をすべてデータ・アーカイブに公開し、問題関心および研究方法を共有する者が随時自由に活用できる研究環境を整える。

3. 研究の方法

研究方法は特に次の事項を柱として組み立てられている。

- (1) 先行調査研究がほとんどなされていない事実に鑑み、第一次資料の発掘と蒐集を不断に行う。

本調査研究で蒐集した第一次資料は将来データアーカイブに保存し他の研究者の活用に供する。

- (2) 第一次資料が一定程度発掘・蒐集できた時点で、仮説的概念である宗教的文化統合 (religio-cultural integration) を検証する形で調査研究を進める。

- (3) 上述の調査研究は集約的現地調査 (intensive fieldwork) をできるだけ長期に実施する。

仮説検証には反対証明を行う必要があり、理論とその実証を無限に反復しうる範囲に限定しつつ大量の時間をかけて客観的な方法でこれを行う。

- (4) 調査は、時間・空間構造、社会構造、心的態度など複数の分析視点から全体を包摂する形で厳密にかつ継続的に行う。

- (5) 以上の調査は集団の断面だけでなく、個人の断面でも行う。宗教事象の共有だけでなく、その分有の様態も客観的に取り出す必要があるからである。

4. 研究成果

- (1) 従来研究成果をまとめた和文・欧文の報告書の作成

1983 年から継続して調査研究を行い蓄積してきた調査研究結果の中から、研究目的に掲げた内容に関連して特に重要と考えられるものを

抜き出してまとめ、次のような体裁で報告書に掲載した。

和文

題目

「メキシコ低地マヤ地域におけるマヤ・カトリック的宗教文化統合の実証的研究」 pp.1-323

本報告書には 11 の論文を掲載した。その概要は次のとおりである。

第 1 論文から第 3 論文は、時間とともに人間の思考の根底的枠組を構成している空間感覚を分析するために、空間感覚分析概念を明確にするとともに、作業仮説を構築し、その作業仮説を検証する形でマヤ・カトリシズムの空間感覚を集団のレベルと個人のレベルで分析している。

第 4 論文と第 5 論文は、マニの社会構造を婚姻形態（駆け落ち婚）と擬制的親子関係（パドリナスゴ・マドリナスゴ・コンパドラスゴ）を大量の事例にもとづき具体的に分析している。分析の場面では、現在の実態だけでなく、教会史料を使用することで事象の歴史的展開をも考察した。

第 6 論文と第 8 論文は太古マヤ的要素の残存を、第 7 論文と第 9 論文はカトリシズムをめぐる宗教意識と宗教行動の現実を論究しているが、全体としてはマヤ・カトリシズム複合体の存続と変容を分析している。太古マヤの要素は、特に、呪医＝祭司（メン）を担い手とする口頭伝承および教会外儀礼慣習の領域に顕著に残存している。一方、カトリック的要素は教会や家庭祭壇およびそこに画かれ用いられている聖像をめぐる宗教意識や宗教行動の領域に現存している。低地マヤのカトリシズムはこれらの二つの領域が近づき交じり合い全体を構成するマヤ・カトリシズム複合体として存続変容してきていることを検証している。この事実は、例えば、奇跡の場面に顕著に現れており、そこには呪医＝祭司（メン）を担い手とするマヤ的奇跡と聖母崇拜を契機とするカトリシズム的奇跡が混然一体となって機能し、カトリック社会の思考と行動に極めて強い影響を与えている。

第 10 論文と第 11 論文は、空間感覚とともに人間の思考の根底的な枠組である時間感覚の現実を個人レベルと集団レベルで分

析している。ここでは時間感覚分析のモデルと作業仮説を具体的に提示し、それらを検証する形で実施した調査結果の中間のまとめとして考察している。特に、集団のレベルにおける時間感覚は、筆者が 1977 年以來インド・グジャラート州ナウサリで調査研究してきているゾロアスター教徒パーシーにおける時間感覚と対比しつつマヤ・カトリシズムの時間感覚の特性を浮き彫りにしている。

英文

題目

A Study of Catholic Culture Integration of Lowland Maya Communities in Mexico. pp.1-224

本報告書には 10 の論文を掲載した。その概要は次のとおりである。

第 1 論文は調査地マニの物理的環境および生態の基本的性格を論述している。マニの時間感覚、空間感覚、社会構造、経済的活動、儀礼慣習を調査研究するための基本的要件を理解することが目的である。

第 2 論文から第 5 論文は、マニの社会構造を擬制的親子関係、エヒード、婚姻形態（駆け落ち婚）、叩くという行為、母固着などの視点を中心に分析している。駆け落ち婚の土着性を取り扱った史資料は筆者が検索しているかぎり存在していない。また、マツョの実態を親が子を叩くという行為ならびに母固着という視点から具体的に分析した資料も、エリッヒ・フロムの質問紙による調査結果を除くと他にはないと考えられるので、カトリシズムの中心的思考に関する基礎的資料の蓄積に少しく寄与していると言えよう。

第 6 論文は心理学的方法を使用して祭壇および聖像をめぐるカトリック的宗教意識と宗教行動の一面を具体的に分析している。ここには教会の祈りと区別すべき祈りの内容が取り出されていると同時に、聖像に対する宗教意識が具体的に論究されている。上述のテーマに関係する具体的資料は蓄積されてきていないので、第一次資料はすべて今後の批判的検討のためにそのままの

形で記録し保存している。

第7論文、第8論文、第9論文は時間感覚の分析概念の明確化、時間感覚分析モデルの作成、時間感覚分析のための作業仮説の提示を行った上で、マニにおける時間感覚を集団・個人の両面で分析している。太古マヤの要素が残存しているからか、マニにはカトリック社会の時間感覚の特性の一つである終末論的な時間感覚はほとんど現存しておらず、繰り返しの時間感覚が残存している。とは言え、神による審判およびそれによる救いの思考は厳存する。

(2) 個人の断面による時間・空間感覚に関する第一次資料の蒐集とその分析

時間感覚について

従来マヤ・カトリック社会の時間感覚を集団の断面から分析してきた。聖堂や十字架の歴史と構造、祈りの内容、擬制的親子関係、マヤ儀礼慣習、共有地、などが分析の主な対象である。

今回の調査研究では、質問紙(質問大項目2項目)、有意味カード(6枚)とTAT型の有意味写真(2枚)を使用して、時間感覚分析モデルおよび作業仮説にもとづいて個人の断面で時間感覚を分析した。

主な分析結果は次のとおりである。

マニのカトリックは自己把握、太古の神話的事実の現実化、「小さな時間(この世の日常的な時間)」における「大きな時間(キリストの誕生および死ならびにこの世の始まりと終わりなどを含む時間)」の再現(representation)と再統合(reintegration)などの場面で宗教的な理念や教えによる内調整(inner adjustment)を行っている。

また、「聖母マリアと幼子イエス」と「イエスの磔刑」の写真への反応は、宗教が象徴を通じてその太古性を何千年という巨大な時間のなかで持続させてきていること、聖母マリアおよびイエスに関するきわめて古い知識と宗教的な教えが、時間の経過とともにマニのカトリックの内面に深く定着し、人々の暮らしのすべての面にさまざまな意味を与え続けていることを示している。

宗教現象が共有されている実態を具体的にかつ徹底に分析することも重要であるが、と同時に宗教現象が分有されている様態を個別具体的に抽出し、両者を合わせて全体像を描き出すことも不可欠であろう。この意味で、第一次資料を大量に蒐集し、客観的な分析の材料とした。

空間感覚について

従来マヤ・カトリック社会の聖堂、祈り、地縁・血縁、土地・家督を集団の断面で分析し、空間感覚に関する新しい事実を二三明らかにした。具体的には、マニの空間感覚の全体像として、太古マヤから保持されてきている中心・四方(五方)および共有地をめぐる歴史・考古学的事実、マヤの神々に関係する神話的事実の伝統的儀礼による現実化、教会における祈りと擬制的親子関係(コンパドラスゴ)に表われている普遍性が重要であることを提示した。

さらにマニの修道会・教会がマヤの伝統とカトリシズムを複合させつつ重要な空間として存続変容してきている実態を分析した。具体的には、修道会・教会の建築空間の象徴性を宗教事象の太古性、普遍性、内調整(inner adjustment)機能の視点から分析した。主に中心(kiwic; centro)、インディオ学校・インディオ礼拝堂、セイバの木(yaxche)・洞窟(actun)、マヤ十字形と十字架、聖母マリアによる幼子イエスの左抱き聖像を分析することによって、マニの修道会・教会がマヤ・カトリシズム複合体として存続変容してきている事実を提示した。

今回の調査研究では空間感覚を個人の断面で分析する調査方法を提示し、その方法にもとづく調査結果の一部を分析した。その概要は次のとおりである。

マニでは空間が神や神聖な存在に関係する場所を中心としてとらえられ、その場面では太古の要素をもつことばや象徴によって中心と外周というような価値づけをともなった色づけがなされる。空間として、教会/家庭祭壇、ミルパ(トウモロコシ栽培)/パルセーラ(果物柑橘類栽培)

学校/広場の写真を示し、それらに対する意味づけを個別聴取

調査によって蒐集し、空間感覚が分有されている様態を取り出した。

マニの人びとは場所に関してさまざまな現実を語るが、それらの現実には神聖な存在に係る理念に結びつけられて立て直される(adjust)。また、場所は閉じているというよりも開かれたところとして意味づけられ、私有よりも共有、所有権よりも使用权という意味づけが強まる。

ここでも、時間感覚の項目で述べたことと同じ視点から、また同じ方法によって、宗教現象の分有の様態に関する第一次資料を大量に蒐集した。現時点では、中間のまとめにとどまっていることから、今後さらに厳密な分析を行う必要がある。

(3) 研究成果全体を開示するアーカイブの構築

宮崎公立大学 加藤 厚 教授の協力を得て、次の研究環境を整え、メキシコ中南米のカトリシズムに問題関心のある者による本研究成果の活用に供した。

<http://mmua.html.xdomain.jp/nakabepu/>

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

- (1) メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究
マヤ・ユカテカの一カトリック村落マニの時間感覚分析のための序論的考察(2)
『宮崎公立大学人文学部紀要』第22巻 第1号 2015 pp.113-152
- (2) A Study of Catholic Culture Integration of Lowland Maya Communities in Mexico —An Introductory Study of Experimental Methods for Analysis of Space Perception at the Individual Level of a Mayayucatecan Catholic Community, Mani (3)—
Bulletine of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities. Vol.22 No.1 2015 pp.153-196
- (3) メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究

マヤ・ユカテカの一カトリック村落マニの空間感覚分析のための序論的考察(3)

『宮崎公立大学人文学部紀要』

第21巻 第1号 2014 pp.91-134

- (4) An Experimental Method for the Study of Time Perception at the Individual Level—with Reference to a Case Study in a Catholic Community, Mani, Yucatan, Mexico—(2)
Bulletine of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities. Vol.21 No.1 2014 pp.135-166
- (5) メキシコ低地マヤ地域におけるカトリック的宗教文化統合の実証的研究
マヤ・ユカテカの一カトリック村落マニの時間感覚分析のための序論的考察(2)
『宮崎公立大学人文学部紀要』第20巻 第1号 2013 pp.91-134
- (6) An Experimental Method for the Study of Time Perception at the Individual Level with Reference to a Case Study in a Catholic Community in Mani, Yucatan, Mexico
Bulletine of Miyazaki Municipal University Faculty of Humanities. Vol.20 No.1 2013 pp.135-166

[学会発表](計0件)

[図書](計3件)

- (1) 「宗教と時間と空間 メキシコ・ユカタン州マヤ・カトリック社会とインド・グジャラート州ゾロアスター教社会と事例として」 pp.243-262
『宮崎公立大学開学20周年記念論文集』所収 宮日文化情報センター 2014 pp.1-430
- (2) 科学研究費補助金研究成果報告書
「メキシコ低地マヤ地域におけるマヤ・カトリック的宗教文化統合の実証的研究」2015 pp.1-323
- (3) 科学研究費補助金研究成果報告書
A Study of Catholic Culture Integration of Lowland Maya Communities in Mexico. 2015 pp.1-224

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

なし

6 . 研究組織

(1)研究代表者

カハツノルカズ
中別府 温和 (65)
宮崎公立大学 人文学部・国際文化学科
教授
研究者番号：00155805

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし